
赤竹蜻蛉

樽みのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤竹蜻蛉

【Nコード】

N0786J

【作者名】

檣 みのり

【あらすじ】

あるお盆の夕方。紅子は「こたろ」と名乗る少年と仲良くなり、毎日一緒に遊ぶようになります。しかし、こたろは紅子が「やってはいけない」ということを、どうしても止めようとはせず、ついにはけんか別れをしていますが

「童話」に分類していますが、漢字の使い方など、子供向けの書き方はしていません。

「物語もどき」を書きはじめた頃の古い作品ですが、日の目を浴びさせてみるのもまた一興かと思ひ、端っこに置かせて頂きます。

赤竹蜻蛉

お盆の頃になると、何処からかたくさん赤い蜻蛉とんぼがやってきては、あちらにこちらに行きつ戻りつ、尋ね飛ぶ姿が見られます。

紅子べにこは毎年お盆になると、お祖母さんが住むこの隣村へ、お父さんお母さんと一緒に遊びに来るのが決まりになっていました。隣村といっても、紅子の住む村からは歩いて半日はかかる距離です。もう十歳になった紅子ですが、昼間はまだ暑いお天気の中、半日歩き続けるのは、決して楽なことではありませんでした。けれど、もうすぐお姉さんになるのだからと、身体の重いお母さんを支えつつ、紅子は頑張って歩きました。

お祖母さんはいつも決まって紅子に言います。「お盆の赤い蜻蛉とんぼは決して捕ってはなんねえよ。あの蜻蛉は仏さんに乗せて飛ぶものだから、もし、捕まえてしまったなら、どこかの仏さんが行き来出来なくなるからな。」

この村に来ると、紅子は必ず決まって行く場所がありました。お祖母さんの家からちよつと歩いた場所に、広い広い野原がありました。その草たちは、ちょうど紅子の踝くるぶしくらいの高さで、寝転ぶと柔らかい上等なお布団のようでした。

紅子は、草の上に座り込んで見る、ここの大きな夕陽が大好きでした。太陽が沈む前、空も雲も、野原の草や道、座っている紅子さえも、赤く燃えるような金色に包まれる、あの瞬間がとても好きでした。

お祖母さんの家の近くには、紅子と同じ年くらいの子供がいないので、紅子はいつも一人で野原に行って遊び、夕陽を見て、そしてお祖母さんの家へ帰るのでした。

野原の上には、たくさんの赤い蜻蛉が、右に左に飛んでいます。

「今年もたくさんの仏さんが、帰ってきてるんやなあ。」

紅子はお気に入りの少し小高くなった場所に腰を下ろし、ぼんやりと蜻蛉が飛び交う様子を眺めていました。空はだんだんと夕方の色になってきました。

すると、太陽が沈もうとしている方角から、「えい、えい。」と子供の声が聞こえてきます。

そちらに目をやると、紅子よりちいさな男の子が、とりもちのついた棒つきれをふりふり、赤い蜻蛉を追いかけ回していました。

「坊、赤い蜻蛉は捕ったらいかん。」

紅子は急いで、その男の子の側に駆け寄りました。

「あたしのお婆が言うのとった。お盆の赤い蜻蛉は仏さんに乗せて飛ぶもんだから、絶対に捕ったらいかんって。」

男の子は棒つきれをぶらんと下ろし、じっと紅子の顔を見ています。

「坊はどこの子？ もうすぐ夕陽が綺麗になるから、蜻蛉なんか追いかけて、あたしと一緒に座ってみよう。」

男の子はなんにも言わず、やっぱりただじっと紅子の顔を見ているだけです。紅子は少し困ってしまいました。

「坊は迷子か？ うちに帰れなくなっただのか？」

すると、男の子はくるりと背中を向けて、夕陽の沈む方へ、ひよーいひよーいと走っていき、あつという間に見えなくなっていました。

「あつちに走っていったんなら、西沼の方に住んどるんやな、あの子。」

ちょうどその時、太陽はその日最後の金の光で、その場にあるものを染め上げようと、大きく広がり始めていました。

その次の日も、紅子は野原へ行きました。

そしてまた、昨日の男の子がとりもち棒をふりふり、赤い蜻蛉を追いかけているのを見つけました。

紅子は男の子の側へいくと、腰に手をあてて言いました。

「こら、坊。昨日言っただでしょう？ 赤い蜻蛉は捕ったらいかんて。もしかしたら、坊の家の仏さんが帰って来れなくなるかもしれんよ？ 仏さん一人に蜻蛉が一匹。そう決まっとるって、お婆がいった。」

すると、男の子は振り上げていた棒つきれをぶらんと下ろし、しゅんと顔まで下に向けてしまいました。 紅子は、なんだか男の子が可哀相になつてしまいました。

「蜻蛉は捕ったらいかんけど、他の遊びなら大丈夫だから、一緒に遊ぼう？ あたしは紅子っていうんよ。 坊は？」

けれど男の子は、もじもじと下を向いたまま何も言いません。

「坊にもお母さんがつけてくれた名前、あるやろう？ それ、あたしにもおしえて？」

男の子の、下を向いたままの顔を覗き込むように紅子は聞きました。 それでも男の子は、自分の足を見て黙ったまんまです。

紅子はふうとため息を吐くと、まっすぐに男の子を見ました。

「坊は口がないんやな。 あたしが何を言つても、なんも言わん。せつかく友達になろうと思つたのに、残念やなあ。」

そう言つと、紅子はくるりと背中を向けて歩き出しました。

すると、どうでしょう。 さっきまでじつと下ばかり見ていた男の子が、ひょーいひょーいと走ってきて、紅子の前に、先ほどよりは顔を上げて、立ちふさがりました。

「……こたろ。」

男の子は、ぽつんとそう言いました。

紅子は嬉しくなつて、にこりと笑いながら、男の子の顔を覗きました。

「そうか。こたろちゃんいうんやね。ここにはあたし、友達おらんかったから、こたろちゃんと会えて嬉しいよ。仲良うしようね。」こたろも、始めてにこりと笑いました。

それから毎日、二人は一緒に遊びました。

野原の裏にある林を探検したり、小川で綺麗な石つころを拾ったり。紅子は、お祖母さんやお母さんが教えてくれたかぞえ唄を、こたろにも教えてあげました。

そして、ふたりで夕陽の色に染まった後、家へと帰るのでした。けれど、そんな遊びをしている時にも、こたろは、とりもちのついた棒つきれを放しません。夕方になって、赤い蜻蛉がよりたくさん、野原の上を行き来するようになると、こたろは蜻蛉ばかりを追って、紅子が何を話しても上の空でした。

「どうしてこたろちゃんは、蜻蛉ばかりを追いかけるの？ 何度も言ったら？ 赤い蜻蛉捕ったら、何処かの仏さんが行き来出来なくなるって。もしそれが、こたろちゃんのお爺やお婆のだったら、嫌でしょう？ 誰の蜻蛉捕っちゃうかわかんないんだから。蜻蛉ばかり追いかけているんなら、あたしはもう、こたろちゃんとは遊ばんよ。」

こたろは、蜻蛉を指差して言います。

「ちがう。捕るのはこたろの蜻蛉。こたろの蜻蛉はもういないから、こたろは母ちゃんにあえない。だから蜻蛉いるの。」

そういうと、こたろはひょいひょいと、西沼の方へ走って行ってしまいました。

次の日から、こたろは野原に来なくなりました。その次の日も、次の日も、紅子は夕陽の赤が消えてしまうまで待ちましたが、こたろがひょいひょい、草を飛び越えてくる姿は見られませんでした。

紅子は、自分が意地悪を言ってしまったって、こたろが怒っているの

だろうと思ひ、いつもこたろが走っていく、西沼の方へ行つてみることにしました。

けれど、そこには家などはなく、ちいさな崩れかけたお堂と、二つのお墓がひっそりと寂しげにあるだけでした。

ちいさなお墓には、「幸太郎じやうたろう」という名が、薄っすらと刻み付けられておりました。

その夜、紅子はお祖母さんに、西沼のお墓のことを聞きました。

「あそこには、一年くらい前に、流れ者の母子が住み着いたんだがね、母親は、ひと月もせんうちに病を得て逝つてしもつてな。残された息子は、そのままあのお堂に住み着いていたんだがな、ちいこいのに愛想がのうて、村の者の畑から野菜を盗んだり、いくらいかんといつても、赤い蜻蛉を追いかけて捕まえたりしてなあ。村のものは誰も、あの子供を相手せんようになった。そうしているうちにな、あの子供。西沼に落ちて逝つてしもつてなあ。まだ五つ六つだったろうに。可哀相なことをしたと村のみなが思つてな、せめて母親の横に眠らせてやつたんじゃ。」

今頃は、母親と二人、故郷に帰つて、仲良うしておるじゃろうよ。」

紅子は哀しくなりました。どうしたら、こたろがお母さんに会えるのか、一生懸命に考えました。

そして、紅子はお父さんに、竹の蜻蛉を作ってもらいました。

紅子は、竹の蜻蛉を赤い色に塗りました。

その赤い竹の蜻蛉を持つて、紅子は野原へ行きました。もうすぐ、紅子の好きな空が赤い金色に染まる頃です。

赤く塗つた竹の蜻蛉は、より赤く映え、本当の赤い蜻蛉よりずっと綺麗だと、紅子は思いました。

「こたろちゃん、いるか？」

すこしの風が、草をならしました。

紅子は、腕をいっぱい伸ばし、竹の蜻蛉が、少しでも高く、高く飛ぶようにしました。

「もう、蜻蛉を追いかけていいからね。早く、お母さんに会えるといいね。」

次の年の春、紅子はお姉さんになりました。

ちいさな弟は、「幸太郎」と名づけられました。

その年も、お盆には家族みなでお祖母さんの家へいきました。

今年も紅子は、赤く塗った竹の蜻蛉を持って、野原へと向かいます。

竹の蜻蛉を飛ばすと、ひょーいひょーいと跳ねながら走ってくる、こたろのちいさな姿が、

紅子には見えるような気がしました。

いつか、ちいさな幸太郎をこの野原に連れてきて、一緒に夕陽を見たいと、

紅子は、そう思いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0786j/>

赤竹蜻蛉

2011年1月27日08時40分発行